

平成 22 年 6 月 11 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520444

研究課題名（和文） 日本語フィラーの体系化に関する調査研究

研究課題名（英文） An Investigation into the System of Japanese Fillers

研究代表者

小出 慶一 (KOIDE KEIICHI)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：60178192

研究成果の概要（和文）：出現頻度の高い日本語のフィラー「あのー」「そのー」「このー」「こう」「まあ」「もう」「なんか」「で」「えーと」「えー」及び母音延引形フィラーについて、話し言葉コーパスを利用して出現実態を調査し、それぞれのフィラーが談話行動においてどのような役割を果たしているかを記述した。また、フィラーには、指示詞、副詞などから派生したものと、フィラー専用のものがあるが、それぞれに異なる役割を持つことも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：About eleven frequently appearing Japanese fillers, “ano”, “sonoo”, “konoo”, “koo”, “maa”, “moo”, “nanka”, “de”, “eeto”, “ee” and prolonged-vowel-type-filler, the actual situations of their appearances were investigated and their functions in discourse were described. In result, it was found that Japanese has two types of fillers one of which is derived from adverbs and demonstratives, another of which is exclusively used as fillers, and that they have different functions and roles in discourse.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	300,000	90,000	390,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1000,000	300,000	1300,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：

キーワード：フィラー、話しことば、発話行動

1. 研究開始当初の背景

フィラーについては、認知言語学、社会言語学、会話分析、言語心理学、音声認識などの観点からの研究が行われていたが、個々のフィラーについての具体的な分析は多くはなく、また断片的であり、フィラー全体的についても実証的に検討した研究は見られな

かった。一方、フィラーは、発話にリアルタイムで連動して現れるものであり、発話のメカニズムを考える時に、フィラーの解明は欠かせないものであると考えた。また、通言語的に現象でもあり、言語対照などの有効な観点にもなると考えられた。そこにフィラーについての検討の必要を見て、研究を始めるこ

とした。

2. 研究の目的

日本語フィラーについて次の点を明らかにすることを本研究は目的とした。

- 1) フィラーにはどのようなものがあるか。
- 2) それぞれどのような性格か。
- 3) 全体としてどのような体系をなすか。

3. 研究の方法

データとして、主として、「インタビュー形式による日本語会話データベース」(北九州市立大学)、「日本語話し言葉コーパス」(国立国語研究所)を用い、そこに現れるフィラーの性格を観察・分析し、記述することを通して、フィラー全体の性格を探る方法をとった。

4. 研究成果

4-1. 個々のフィラーについて

本研究では、まず、個々のフィラーの談話行動における機能、役割を記述した。その概要を個々に述べる。はじめに、フィラー専用形と呼ぶ「えーと」「えー」、次に、その他、他品詞から派生したものについて記す。

(1) 「えーと」

① 「えーと」はどこに出現するか

すでに開始されている談話回路の中であって、一定の談話プラン、談話内での役割認識(発話権の所在など)に基づいて談話を行っている際に、談話プランの切り替え、そこで生じた問題への対処などのため、注意を向ける先を変更する必要が生じたところに現れる。

② 「えーと」はどのような機能を持つか

注意を向ける先を変更するという心の動きと連動して現れる。

③ 「えーと」の性質の由来

「えーと」の「と」は、何らかの連続的な内容や行動の中であって、そこまでの流れを一時的に停止させる機能を持っている。この「と」の性格によって、連続している談話の中に停止を作り、注意の配分変更を可能とする余地を作ること

になった。

(2) 「えー」

① 「えー」が現れる条件、現れる位置

談話のプランに従って、また、話者のコントロール範囲内で、談話が進行している場合に現れるものであるが、公的性などが高い場合は、談話内での行動、話題、内容などが推移するところなど、談話にとって有標な推移点に現れるが、公的性が下がり自由度が増すと出現位置の有標性は低くなり、位置についての制約は弱くなる。

② 「えー」が現れる談話の性質

- a. 公的な場面である
- b. 発話内容には話し手に委ねられた自由度がある
- c. 発話権は話し手にあり、聞き手は話し手の話を待ち受けている
- d. 発話内容は事前に準備され、一定のまとまりを持っている

(3) 母音延引型フィラー

これは、「それは、あー」などと、前の語の母音を引き延ばした形で現れるものである。他のフィラーと比べると、他のフィラーが発話や行動に先立って現れるのに対して、母音延引型は、必ず何らかの語に後続して現れるという点で異なっている。対比的に示すと次のようになる。

先行型：談話展開、新規の発話文の(内容)形成処理にかかわる。

後続型：目下の発話文、文内の単位の形成処理にかかわる。と同時に、発話が継続していることを示すために、無音状態を回避する。

(4) 「あの一」「その一」「この一」

① それぞれの性質

この一：発話時に、ある表現内容が心的に思い浮かべられているが、その内容を表す形式が確定していないとき、その内容を指す。

その一：後続する発話内容が、話し手にとって非関与的（話し手に関わりがない、あるいは、聞き手・話し手双方に関わりがない）領域のものであること、あるいは、話し手の独占的な関与を主張のできないものであることを示す。

あの一：話し手が自分の発想から、そして同時に、相手との相互的な調整を行いつつ談話行動を行おうとするときに現れる。

②3つのフィラーの相互関係

a. フィラー出現時の処理対象（話題領域性のあり方）

この一：話し手の心内にある表現内容

その一：話し手にとって非関与的な内容、あるいは聞き手にとって関与的な内容

あの一：話し手にとって関与的な内容や行動

③聞き手との関わり方（対人性のあり方）

この一：（対人性なし）

その一：聞き手への配慮

あの一：聞き手との調整

(5) 「こう」

①「こう」の性質

心的に思い浮かべられたイメージ（表現対象）について、そのイメージを心的に走査しながら、それを表現する形式の模索が行われていることを示す。そのイメージは、ひとつのことがら、あるいはそれを構成する要素など、ひとつのイメージとして把握できる程度の大きさであると考えられる。

結果として、表現は得られないこともあるし、また、得られたとしても必ずしも確

定的なものではないという含意が生ずる。

②「この一」との比較

類似した性質を持つ形式に「この一」があるが、「この一」は「実時間的に、対象にもっともふさわしいカテゴリ名を探索している」ところに現れるという点で、「こう」と異なる。

(6) 「まあ」

副詞からフィラーまでの用法の中で、一貫して維持されているのは、発話内容について、それが暫定的なものであるという留保を加え、断定を避けるということである。フィラーとしての「まあ」の出現は、概ね2つのタイプに分けられる。内容に関する留保的な姿勢を反映するもの(a～d)と、内容の区切りについての意識がより前面に出ているもの(d～f)とである。

- 進行中の発話内容についての留保
- 列挙される例示の適切性に関する留保
- 自身の見解についての留保
- 発話内容の要点の留保的提示
- 対話者の発話への言及
- 談話の内容的な区切り形成

(7) 「なんか」

「なんか」は不定代名詞から副詞用法を経てフィラー化したもので、珍しい由来を持つものである。談話内での機能は、次の2点にまとめられる。

- それまでの話題との関連性のあいまいな情報を導入して談話の方向を修正する。
- 新しい情報を持ち出すときに、それが間接的、不十分なものであると標示し、相手への配慮を示す。

(8) 「もう」

「もう」は副詞用法を持つが、フィラーとしては、次の場合に現れる。a～cの3つは、a、bを両極とし、両者にまたがる形でcがあるという関係にある。

- 話題の事態の成立を当然のことと見る姿勢と連動する。

- b. 話題の事態が特筆すべき経験であるとする姿勢と連動する。
- c. 話題の事態に対して話し手がなんらかの思い入れを持つことを示す。

(9) 「で」

「で」は、フィラーとして見ることができるか判断に迷うものであるが、本研究では次のように考えた。

①対話に現れる「で」

- a. 目下の話題や文脈に区切りを付けると同時に、そのあとに目下の関心事が続くことを示す。
- b. 後続する「目下の関心事」とは、既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、それらの内容を展開・補完するなどして、談話構造上の次のステップに進むことを示す。

②独話の「で」ーフィラー化する「で」

「で」は、とくに独話においては、目下の話題・内容が展開しているときに、発話処理に連動し、区切りを示すことにより、処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作るというフィラーとしての機能を持つ。このような「で」は、発話冒頭に頻出することがあるが、aに挙げた基本的な機能を保持しており、連続的な内容の発話を形成処理中であることを示す。

4-2. フィラー化について

派生系フィラーと専用形フィラーには次のような機能上の済み分けがある。

派生系 指示詞>発話内容の源泉標示

副詞>発話内容への姿勢標示

専用系 発話内容形成のスペース確保

派生の方向は次のように想定される。

文内の要素⇒対人的コミュニケーション

ン行動の円滑化

では、フィラー化する語にはどのような性格があるかについて見てみると、次のようなものが想定される。

- a 自立要素であり、単独で機能すること。

- b 自立語とはいえ、孤立的な要素ではなく、なんらかの形で対応する要素を持っていること。ただし、二つの要素の間の結びつきは緩いものである。

- c 自立語ではあるが、内容語であるというよりは、外界に指示対象を持たないもの、あるいは、話し手の姿勢を示す語としての性格を備えていること。

- d 対応要素との結びつきが必ずしも明確でない用法のあること

- e 意味的な面で、内容について感覚的な把握であること

つまり、このような条件の下でフィラー化が起きるのは、次のようなプロセスを通るのであると思われる。

対応する要素を持つ自立的機能語>対応要素間の対応の緩み>対応要素の一方の消失>残された要素のフィラー化

このようなフィラー化を起こす動機付けとして考えられることは、全体として見れば、まず発話形成というコミュニケーション行動の支援ということなのではないかと思われる。

4-3. フィラーの体系と機能

以上のフィラーに関する検討から、フィラーについて、次のような知見を得た。

①まず、フィラーを捉えるための観点として次のようなものが挙げられる。

A {2 値的な特徴}

- a. 談話外の行動時にも現れるか
- b. 聞き手が必要かどうか
- c. 一定の情報性を持つか
- d. 談話の開始性があるか
- e. 談話での割り込み時に現れるか
- f. 何らかの要素に後続して現れるか先行して現れるか
- g. 何らかの語からの派生かどうか

B {程度的な特徴}

- a. 公的性が高い談話ほど出現するか
- b. 準備性の高い談話ほど出現するか
- c. 発話について自由度が高い談話ほど出現するか

d. 出現は社会的要求によるか発話形成上の要求か

②これらの観点は、言語行動あるいはヒトの行動一般という文脈においてみると、次のような問題であることになる。()内は、①のa～gに対応する。

a. 人の行動と音声（掛け声、唸り声なども含まれる）との関係（a、g）

b. 非対人場面での人の言語行動（b）

c. 発話行動とそれに伴う行動（c）

d. 談話の形成との関係（d、e、f）

e. 語の機能変化（g）

③フィルターの機能については次のようなものがあることが予想された。

a. 発話の流れの転換（発話中の不測の事態などへの対応）

b. 発話が継続中であることが表示される／発話権の保持（非意図的な表示）

c. 社会的要請を満たす（すぐに話し始めない、聞き手の注意を向ける余裕を作る）

d. 思考と言語化の間の空隙を埋める（意識の集中、継続）

e. 発話内容の源泉が表示される

f. 発話内容に対する話し手の心的な姿勢が表示される

g. 話し手の意識の向いている方向を示す

これらをさらに要約すれば、フィルターは談話の中で次のようなレベルに関わっていると考えられる。()内は、上のa～gに対応する。

α. 発話行動も含めた行動の調整（a）

β. 談話運営の調整（b、c、d）

γ. 発話内容にかかわる話し手の意識（e、

f、g）

これをさらに、ヒトの行動一般と言う観点から見ると、フィルターは、主たる行動に随伴するものであり、かつまた、3次的随伴として位置づけられるように思われる。

3次的随伴とは、1次、2次の層が、音声による意図伝達行動にいわば必ず随伴する要素であったのに対して、必ずしも必然的なものではないタイプのものである。

フィルターは、この第3層に属すものであ

ると考えられる。人の意図伝達行動（発話行動も含む）にとって必須のものではない。

そして、必須的に随伴するものではないということは、それゆえに、フィルターの出現には、一定の理由があるはずだということになる。3次的な随伴要素としては、フィルターのほかにも、唸り、言い淀み、沈黙などがあるが、これらはコミュニケーションの円滑さが保てなくなってきたときに出現するものと考えられるべきものと思われる。

4-4、フィルター研究における位置づけと展望

本研究に意味があるとすれば、多くのフィルターについて統一的な観点から検討を行った点、また、自然発話コーパスのデータによって検討を行った点であると思われる。その結果、これまで談話管理、談話処理という観点のみで扱われていたフィルターを、ヒトの行動一般との関係へ位置付ける糸口を見出した点であると思われる。

今後の展望であるが、まず研究の深化のためには、フィルター出現については話し言葉コーパスの充実とともに、独り語とデータなど、現在得られていないタイプのデータ収集が模索される必要がある。

さらに研究の方向として、第2言語習得とフィルターの関係、また、フィルターはどの言語にも見られる現象であり、通言語的な観点からの研究は、発話行動あるいは行動一般と音声現象とのかんけいについて、多くの知見をもたらしてくれるのではないかとと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

①小出慶一（2009a）『『えーと』再考—談話運営という観点から—』『埼玉大学紀要（教養学部）』45巻1号：45-57。（査読無）

②小出慶一（2009b）『『えー』と談話の性質—独話データを中心に—』『埼玉大学紀要（教養学部）』45巻2号：33-48。（査読無）

③小出慶一（2008a）「発話行動における『で』の役割—『で』のフィルター化をめぐる—」『埼玉大学紀要（教養学部）』44巻2号：27-40。（査読無）

④小出慶一(2008b)『現代日本語における語の意味・用法の広がりに関する研究—多機能化、フィラー、フィラー化をめぐって—』埼玉大学学位論文. 未公刊. (査読有)

⑤小出慶一(2007a)「フィラー化の様相—『まあ』の場合—」『埼玉大学紀要(教養学部)』43巻1号: 57-72. (査読無)

⑥小出慶一(2007b)「『なんか』の用法について—フィラー化の過程—」『日本学研究論叢第五輯』(北京外国語大学) 211-220. (査読無)

⑦小出慶一(2006)「日本語フィラー『この—』『その—』『あの—』について: 由来、機能相互関係」『埼玉大学紀要(教養学部)』42巻2号: 15-27 (査読無)

[学会発表] (計1件)

①小出慶一(2007)「『なんか』の用法について—フィラー化の過程—」北京外国語大学 2007 北京中日教育文化国際フォーラム、2007年9月22日.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小出 慶一 (KOIDE KEIICHI)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号: 60178192

(2) 研究分担者 ()

研究者番号:

(3) 連携研究者 ()

研究者番号: